

説話と物語

——竹取物語を中心として——

吉 田 比 呂 子

源氏物語の絵合の巻に「まづ、物語の出できはじめの祖なる『竹取の翁』に『うつほの俊蔭』を合はせてあらそふ」とあるように、竹取物語のことを「物語の出できはじめの祖」と言っている。阪倉篤義氏も「竹取における『文体』の問題」の中で、和文特有の助動詞「けり」によってむすばれている「解説的に物語る」叙述の態度をふくんだ様式の文といわれている。^{注1}一般的に物語と説話の位置関係は物語のジャンル一つとして説話を含み、説話の特質は口承・書承による伝承性にあると言われている。また、抒情性・象徴性・高貴性・構想力などに乏しく、事件・行動を描出する批評性を持つ短編の作品ともいわれている。物語との大きな違いは潤色や虚構の加わり方にあると言える。運命や心情の揺れ、人間としての愛情・心情を描くことにより、物語は人の世の姿を語ると言われている。本稿は竹取物語を中心として説話が物語性を獲得する過程を考えたい。

(一) 説話系列と物語系列

ここで説話系列の竹取と言っているのは、院政期に成立した今昔物語集の卷三十一に所載されている「竹取翁、見付けし女の児を養へる語」や海道記・古今和歌集の注釈書・桂川地蔵記・三国伝記等々の中に記載・収載されている竹取の類話のことを総称したものである。物語系列の竹取とは竹取物語とこれを取り巻く大和物語・宇津保物語・源氏・栄華・狭衣・浜松中納言物語等々の王朝物語に引用されている竹取の記述の総称である。この二つの系列を比較検討することによって、竹取物語の物語としての成立や構成のあり方を捉えることができるのである。

説話系列の竹取は今昔物語集を始めとして、主人公（赫奕姫・天女）は月に帰らず、天上や空に帰っている。説話系列の竹取の最終場面を列挙してみると、今昔物語集では「空より多くの人来りて、輿を持って来りて、この女を乗せて、空に昇りにけり。」とある。院政期に成立した今昔物語集の女は空に昇っている。鎌倉時代に成立した海道記には「飛車を下して迎へて天に昇りぬ」とある。同時代の古今和歌集の注釈書の類にも空に帰るとある。古今和歌集序聞書三流抄「吾は天女なり。」古今和歌集大江広貞注「空へこの女を率て昇りにけり。」宮内庁図書寮本の古今集注の卷の六の注に「帝釋に奉らんの志深くて、空へこの女を率て昇りにけり。」卷十九の誹諧歌の注に「此の娘を引具して、天つ空へ昇りけり。」風葉和歌集にも「天の迎へありて昇り侍りけるに、」とある。室町期の説話にも天女、空に帰るとある。桂川地蔵記「彼レハ、上界之天女也」三国伝記「妾ハ上界ノ天女也。」臥雲日件録抜尤「今當レ皈_レ天上」謡曲の富士山にも「時至りけるか天に上り給ひし時、」となっている。この説話系列の天女・カグヤ姫は鶯の巢の中で発見されるものが多い。鶯の巢にホトトギスが卵を生み鶯に育てさせるといふ事柄に掛けた発想

と命名とも考えることができる。カグヤ姫（鶯姫）は仮りの親の竹取翁によって育てられている。注釈書や室町期のものには仏教的な色彩を見ることができ、しかし説話の大筋にはほとんど変わりが無い。つまりこれはかなり固定化した安定した伝承であったといえることができる。

これに対して王朝物語に引用されている竹取物語はどうであろうか。一言で言ってしまうことが許されるならば大和物語以降、王朝物語に見られる系列のものはカグヤ姫が月に帰ってしまうという話の形で定着し、王朝物語の世界ではその形が一般的になっていたと言える。大和物語の七十七段に八月十五夜の宴が催され父の帝のもとへ行く喜種を留めるために桂の皇女が「竹取のよよになきつつとどめけむ君は君にとこよひしもゆく」の歌を歌ったという話がある。これは宇多院の延喜九年（九〇九年）のころの話であるから、もうこのころにはすでに月とカグヤ姫と竹取の翁の話が定着し流布していたと考えることができる。宇津保物語の内侍のかみの巻にも朱雀帝が以前から思い焦がれてた俊蔭の娘に逢瀬の約束を求めているところで「十五夜にかならず御迎へをせむ。」といっている帝に対して尚侍のかみ（俊蔭の娘）は、「それはかぐや姫こそさぶらふべかなれ。」とか「子安貝は、近くさぶらはむかし。」などと答えている。帝もこのやり取りの中で、「こは、珠の枝贈りてさぶらはむかし」などと言って竹取物語の内容を強く意識して構成していることがわかる。源氏物語の手習の巻では浮舟と尼君の様子を述べているところに「かぐや姫を見つたりけむ竹取の翁よりも、めづらしき心地するに、」などと言っているし、絵合の巻などには「火鼠の思ひ片時に消えたるも、」とか「庫持の皇子の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて珠の枝に疵をつけたる過ちとなす。」など当時の竹取物語の受容の様子を示している。栄花物語の楚王の夢では「今宵の月ぞ、まことにかぐや姫の空に昇りけむその夜の月かくやと見えたる。」などと言っている。浜松中納言物語の巻四でも吉野姫君について「竹の中より見つけたりけむかぐや姫よりも、これはなほ珍しうありがたき心地して」とあ

る。夜の寢覚の巻一にも、「むら雲の中より望月のさやかなる光を見つけたる心地するに、」とあり、竹取の翁の家とカグヤ姫の名前を出している。狭衣物語は「嫉捨ならぬ月の光」とか「竹の中にも尋ね侍りなまし。」などとある。これらの物語の中で十五夜・望月・月の光・竹の中・竹取の翁・カグヤ姫が一つの物語の構成要素として明確に理解されていたということが判かる。竹取物語とは月の帰るカグヤ姫の物語なのだと王朝物語世界では考えられていたと言える。

それでは物語系列の月に帰るカグヤ姫と説話系列の天上に帰るカグヤ姫とは一体何が原因で二つに分岐してしまったのだろうか。それは説話と王朝物語との嗜好の差であり興味の差なのではないだろうか。王朝物語世界と説話の世界を支えていた人々の嗜好の差がこれらの伝承（この場合書承も含めて考えている。）の過程の中で物語のスタイルを変えてしまったと考えることができる。大和物語以後、宇津保・源氏・栄花・浜松中納言・夜の寢覚・狭衣に至まで王朝物語の世界では月とカグヤ姫の物語のスタイルで定着し流布し理解されていたのである。月に帰るカグヤ姫のスタイルと天上に帰るカグヤ姫のスタイルは、前者は王朝物語の世界で変形され受け入れられ、後者は説話の世界で繰り返し伝承されつづけた。享受者の嗜好によって物語化され伝承されつづけたものと説話として伝承されつづけたものの相違ということになる。

(二) 月に帰るカグヤ姫の誕生

物語系列に見られる月に帰るカグヤ姫というスタイルを支えていたのは当時の宮廷社会で行なわれていた行事にその原形を求めることができる。八月十五夜に行なわれていた観月の宴である。仲秋の観月の宴の際に作詩された

漢詩文がおさめられている「田氏家集」という集がある。「田氏家集」は島田忠臣の承和（八三四年）頃からの作品が収載されている。この家集の中に「八月十五夜宴月」とか「八月十五夜惜月」といった題名を持つ漢詩がある。また、菅原道真にも「本朝文粹」所収の「満月光暉成陳中庭之玉帛」という作品が残っていることから承和あたりから貞観（八五九年）頃には、かなり盛んに宮廷で観月の宴という行事が行なわれていたということが判かる。延喜九年（九〇九年）の日本紀略の八月十五夜の記事と「本朝文粹」の卷八所収の菅原淳茂の「月影満秋池」も観月の宴の様子を知ることが出来る良い資料である。本来、八月十五日という日は農耕の節目で収穫月であることから観月の宴として宮廷の行事化する以前にも庶民（民間）の収穫祭としての意味があったという考え方もある。しかし、これら漢詩文に見られる観月の宴は、^{注2}「中秋名月」と『竹取物語』の中で奥津春雄氏が指摘されているように中国との交流によって輸入された行事であり文芸的興味である。この輸入された行事は、^{注3}文徳天皇（八五〇）～八五七年）の頃から始まり、宇多（八八七～八九六年）醍醐（八九七～九二九年）の頃に盛んに行なわれるようになり、これを背景にして竹取の八月十五日に月に帰るカグヤ姫の物語の筋が案出されたということは十分に考えられる。この観月の宴で竹取の不死の薬を焼くという内容と関連すると思われることが行なわれている。「月令広義」の巻十五の八月の条には「十五日、中秋節、秋九十日、是日為中秋、是夕月中天是正、乃太陰朝元、宜守夜焼香」とある。八月十五夜には香を焼くという風習もあつたようである。これは蛇足だが不死の薬を焼くことと香を焼く起源とを重ねているとも考えられる。

(三) 天に帰るカグヤ姫の背景

説話の中で伝承され続けた天に帰るカグヤ姫の背景には何があったのであろうか。前述の論文の中で奥津氏は日本の神話は太陽神話であること、月の信仰がほとんど現われていないこと、農耕儀礼と関連するのは太陽神であることなど合わせて指定されている。古代から天へ帰る神・天女の話や天つ神の子・穀霊神の話は数多くある。丹後国風土記逸文（古事記裏書）の奈具の社の天つ乙女の話は中世的要素がかなり入り込んではいないが典型的な白鳥処女説話である。この天つ乙女は説話の中では太陽神に付属する穀霊神トヨウケの大神と解釈され縁起として構成されている。

記紀に見える神の天上帰還の話は神代紀上の第五段の本文に「伊奘諾尊・伊奘冉尊……共に日の神を生みまつります。大日靈貴と號す。一書に云はく天照大神といふ。此の子、光華明彩しくして、六合の内に照り徹る。『久しく此の国に留めまつるべからず。自づから當に早に天に送りにて、授くるに天上の事を以つてすべし』」ここでは地上で生まれた太陽神が天上へ行くという話である。この天照大神（オホヒルメ）という太陽の女神の神性や表象の語り方に注目してみよう。太陽の女神は「光華明彩しくして、六合の内に照り徹る」という表現で太陽の光り方を述べている。この光り方と竹取物語のカグヤ姫の光り方やこれらと関連すると思われるカグヤ姫と火について考えてみよう。

(A) 光と火とカグヤ姫

竹取物語には主人公（光る存在）カグヤ姫に関連して光と火が物語の各所に出て来る。まず、竹取物語の冒頭カ

グヤ姫の登場の場面で「その竹の中に、本光る竹なむ一筋ありける。……筒の中光りたり。」とある。カグヤ姫の発見は光によってなされたのである。カグヤ姫の容姿についても「この児の容貌のけうらなること、世になく、家の内は暗き所なく光り満ちたり」とある。この光り方については後述する。さて難題の答えに対しての判定にも光が関連する。最初の難題石作皇子の仏の御石の鉢と次の車持皇子の蓬萊の玉の枝、三番目の阿部の右大臣の火鼠の皮衣の判定はカグヤ姫自身が行なっている。ここで判定の仕方注意到い。

仏の石の鉢に対してカグヤ姫は開口一番「光やある」と言つて見ている。石の鉢に光があるかないかが本物かニセ物かの判断の拠り所であり、光ることが本物と判断する条件なのである。ここでは「螢ばかりの光だになし」とカグヤ姫は判断し、「置く露の光」の歌と「白山にあへば光の失するか」との歌の贈答の歌の後に掛詞的な諺の解釈でしめくくっている。

庫持皇子の蓬萊の珠の枝の作り話の中にも珠の枝の生えていた場所を「照り輝く木ども立てり」と述べている。偽計の暴露は工匠の訴状によつてということとで現実味を持たせているが、ここでもカグヤ姫は光り輝く物を求めている。

阿部の右大臣の火鼠の皮衣の真偽の判定には火が使われカグヤ姫自身が行なっている。皮衣は「金青の色なり。毛の末には黄金の光さしたり。宝と見え、麗しきこと並ぶべきものなし。」とある。真偽の判定のためにカグヤ姫は「火の中にうちくべて焼かせ給ふに、めらめらと焼けぬ」という方法をとっている。ここで火に焼かれ燃えてしまった皮衣に対して、「さればこそ異物の皮なり」と判断している。これら三つの難題の答えの品物は本物であれば光り輝くものであり、火に焼けないものなのである。庫持皇子の場合やや変形しているがカグヤ姫が光る物を求めていたことと品物の真偽の判定を彼女自身が行なっているという点、共通している。

後半の二つの難題に対してはカグヤ姫の判断が表れていないが、宝物の性質として如意宝珠（夜光る玉）の象徴であると言うことはいえる。龍の頸の玉も子安貝も異国の品物ではないが夜光る玉（光る玉）の発想が繰り返し繰り返し使用され話を構成しているのである。

このように光る物を求める竹物語のカグヤ姫を表現する場合、「光り満ちて、けうらにて居たる人あり。」とか「かや姫、きと影になりぬ」などのように描いている。彼女自身光の化身であるという捉え方がなされている。このことは今昔物語集にも顕著にみられる。カグヤ姫の発見の際に「篋の中に一の光あり。」と言っている。ここではカグヤ姫が光そのものであると表現している。今昔物語集ではもちろんのこと竹取物語の中でもカグヤ姫が光つていることを物語世界の中で事実として描いている。竹取物語ではカグヤ姫は常に光る物を求め、それを難題として科している。竹取物語はその全編を通して光（火）がキーワードとなり説話性を残存させた形で物語として構成されたものと考えることができる。

(B) 光る人物の系譜と表現

ここで光り方について、光る人物等に共通点を見い出すことができる。上代では前述した天照大神（オホヒルメ）などの太陽女神の光り方を「光華明彩しくして、六合の内に照り徹る。」と表現している。天の岩戸を開いた時の古事記の表現にも「高天の原も葦原中国も自ら照り明りき。」とある。日本書記第七段一書第三の天の岩戸の条でも「則に引き開けしかば、日神の光、六合に満みき。」とある。古代のもう一人の光る人物は允恭記・允恭紀に登場する衣通郎女である。衣通郎女は古事記では割注に「御名を衣通王と負はせる所以は、其の身の光、衣より通り出づればなり。」と述べている。日本書記でも「容姿絶妙れて比無し。其の艶しき色、衣より徹りて晃れり。」とある。この光を伴なう二人の人物を描写する場合に微妙な差があるように思われる。太陽神（オホヒルメ・天照大神）の場合

は、ただ光っているだけでなく六合の内・高天の原・葦原中国といった広い範囲を光でみたさなければならぬ。これに対して単に美女を形容する場合にはただ光を発しているだけなのである。しかし、記紀の段階では双方とも光ることを話の中で事実として表現しているという姿勢は共通して持っている。

中古の王朝物語の宇津保物語の中の光を使用した人物の描写は、俊蔭の娘について述べるところで「十二三になる年、容貌更にいふかぎりなし。あたり光り輝きて、見る人眩きまでみゆ」とある。容貌の美しさの程度として眩いと思われるほどであると言う表現で使われている。もうこの場合は上代の話の中で見られる光り輝く人物の表現のように光ことを事実として描き、実際に光り輝いていると表現しているのではなく、美貌の程度の甚だしいことを示す比喩的な表現として使用されているのである。兼雅についても俊蔭の巻に「玉光り輝く髻髪子の御馬副多くわたり給ふ。」とあり、以下仲忠・忠こそ女一宮・犬宮についても「玉光り輝く」という表現が使用されている。「玉光り輝く」というように玉のように光るという比喩的表現として、もうすでにこの段階で慣用化している。特に忠こそ・女一宮・犬宮に対しては、「玉光り輝くやう」という表現が頻出しこの美貌を表現する言い回しが完成された表現となっている。藤田加代氏が「^{注4}かがやく」主人公と「かをる」主人公」の中で指摘されているように、古代の説話では天日槍や豊玉姫そして日の神の御子（火遠理命）には日（太陽）とかがやくと玉の関連性と連想が顕著に見られる。源氏物語の光り・かがやく人物、光源氏・冷泉院・藤壺の三人にも「玉光り輝き」という表現が見られる。ここでは藤壺のことを「かがやく日の宮」と言っている。このことから、王朝物語の中にも古代の説話世界に見られた玉・光る・かがやく・日（太陽）といった連想の存在を指摘することができる。このような発想を基にした美貌を表現する人物の表現は平安後期の作品でより一層完成された形で使用されることになる。これは説話から物語へと展開する作品の内部に起った変化に伴う現象と言うことができる。説話から物語へと変化に

伴ない語や表現はより具体的になり事実から比喩へと変化していくのである。

夜の寢覚の巻一では幼い中の君の様子を「こよひの月の光にもおとるまじきまして、箏の琴をひき給ふ。」と言っている。巻の二でも中の君について、「なほめづらかなる光りそひ給へる心地して、あさましきまで、うつくしげなるを見るに、」とある。巻の五では寢覚上の美しさを「かばかり、筋ごとに光をはなつやうにて、うちやられ、」と髪について述べている。帝が寢覚上について語っているところにも「ひかりかかやくなどは、かかるを言うなりけりとぞみえし。」とあり、巻の二のちこの君（姫君）のことを大納言が「夜光りけん玉はかくや」と姫の顔立を言っている。

狭衣物語では巻一に狭衣の姿を「光りかがやき給ふ御かたちをばさる物にて、心はへ、眞しき御才などは、」と評したり、「御装束など立ち居つくろい給ひて、いだし立て給へるに、又、今日、光さし添う心地して、めでたう見え給えり。」などとある。巻の三にも狭衣の美しさを「あたり苦しきまで光り輝くやうにて見え給へば」といつている。狭衣物語になると外見に関しては装束や立居ふるまい・有様などについても「光る」と言っている。これは光るという内容が詳細に具体的に捉えられるようになったという傾向を示している。また、外見以外の心ばへや学問の才能などを含めて勝れていることを「光・光り輝く」となどの表現で現わすようになって来ているといえる。このような傾向は浜松中納言物語の中納言や吉野姫君・尼姫の様子注の描写や有明けの別れやとりかへばや物語の表現にも見られる。また、とりかへばや物語の宰相中将の様子は、月の光と対比しながら表現する方法を使っている。

以上、平安後期の物語の中で「光る・光」といった容姿美の形容・表現の特徴は容姿については単に美貌を意味する表現ではなく装束や立居ふるまい・髪の様子などより具体的になり、「光る・光」は象徴的な表現として洗練され、月影などとも対比させるとい手法も現われる。そして内容についても才能や心ばへといった事柄についても

表現するといった傾向もみられる。「光る・光」という容姿美の表現が平安後期に至って表現範囲が拡大したことをこれらの用例は示している。このような比喻表現（光る・光）の表現範囲の拡大は、歴史物語である栄華物語にもっとも顕著に見られる。

栄華物語では白い色と光を重ね合わせる手法が見られる。この外に栄華物語のこの表現に関しての特徴としては、^{注7} 威勢や権威・権力の象徴としてつかわれているという傾向がある。巻三十九の布引の滝では白河天皇の御幸の様子に「儀式・有様・この度はまして今一際光添ひて響きて入らせ給ふ。」とあったり、巻六のかかやく藤壺の彰子入内の場面などにも「この御方藤壺におはしますに、御しつらひも、玉も少し磨きたるは光のどかなる様もあり、これは照り耀きて、」などの表現がある。善仁親王の様子にもやはり、単に美しいと言うのではなく親王の前途が洋々としていることを言う表現として使用されている。

以上、光る人物の系譜と表現についてまとめてみると次のようになる。上代では説話内の事実として光る人物が描かれている。それらの人物の光り方の中で太陽神に関連する人物の光り方は竹取物語のカグヤ姫の光り方の表現と共通している。今昔物語集の竹取では「篁の中に一つの光あり。」とあり、これは主人公の女自身が光であったと述べているのである。また、カグヤ姫が難題を出し求めた品物は光る物であり、玉・火・日を意味する存在であり、玉・火・日・光の連想と重ねることができると述べている。竹取物語では今昔の竹取よりも間接的な表現ではあるがカグヤ姫はやはり、実際に光る存在として話の中で表現されている。そして、玉・火・光・日を求めた存在として構成されている。ここでは宇津保物語以降見られた「光る・光」の容姿美の比喻表現化は見られない。つまり竹取物語の「光る・光」の表現は事実として描かれている説話的な使われ方と言える。話の中で事実として「光る・光」が使われなくなつた時、象徴化・比喻表現化した時に、初めて表現のレベルにおいても物語性を獲得し物語化した言うこと

ができるのである。この「光る・光」という表現は前述したように平安後期になるとより一層顕著に比喩表現として完成され細部にわたり表現されたり、人物の内面に対しても使用されたりする。一方美的表現としては光と色彩を重ねたりする方法も行なわれる。また、権力・権勢の象徴としても使用されることになる。「光る・光」は説話世界では神秘的事実の表現であったが、物語世界では事実としてではなく、これを合理化した形で比喩表現として展開させていったのである。竹取物語はその表現レベルにおいて説話世界の表現を引きずっていると見える。

(四) カグヤ姫の正体

光る物を求める竹取のカグヤ姫のその光り方は太陽神の光り方と共通している。彼女は「光り満ちて、けうらにて居たる人あり。」であり、「かぐや姫、きと影になりぬ」という存在なのである。単に光だけでなく光が満ちる存在なのである。また、影という光り方が彼女の正体(姿)なのである。竹取物語の構成も光る物を求め、光の有無が真偽の判断基準となる形で作られている。ここで糸口としてカグヤ姫の名前と影という現象について少し考えてみよう。竹取以外のカグヤ姫はすべて天上に帰っている。月には帰っていない。前述したように王朝の観月の宴などの行事が反映した結果の変形と考えることができる。それでは玉・火・光・日の連想の幅の中に彼女の正体があるとするならば、光り方の表現から考えても太陽および太陽に関わる神話的人物ではないか? ということになる。

帝に捕まりそうになった時カグヤ姫は「きと影」になったとある。これは彼女の正体を現わした描写と考えられる。それでは影とは一体どのような光り方なのだろうか? 光とは違う光り方と考えることができる。国語語彙史研究会注で発表した「古代の光感覚と色感覚——カゲを中心に——」の中で結論として上代では「カゲ」は赤系統の色彩を

伴なつた光を意味していたことを述べた。早くから佐竹昭広氏^{注9}が上代日本語の色彩について「明^{アカ}—暗^{クロ}」「顯^{シロ}—漠^{アヲ}」という光の二系列であつたことを指摘されている。つまり上代日本語では光によって色を捉えていたということになる。上代の色彩語は光感覚の語といつても良いということになる。とするならば光感覚語は色彩感覚語であつたとも言える。このように考えるならば光感覚の語である「カゲ」には色彩感覚語の一面があつたと考えることができる。万葉集・古事記・日本書紀等の上代の文献の「カゲ」を検討した結果、「カゲ」は赤系列（黄も含む）色彩を伴なつた発光や光を意味する語として上代人は捉えていたといえる。カグヤ姫の名前は「カガヨヒ」・「カグツチ」・「カギロヒ」・「玉カギル」・「カガ」などと同根の語である。上代のカゲについてみると、太陽に向い面する方向を影面（かげつおも、かげとも）と言ひ。火の神の名をカグツチと言ひ。万葉集の歌や記紀の歌謡の中にも特に赤く見える朝の光や夕暮の光を朝日カゲ・夕日カゲと言つてゐる。枕詞である茜さすや赤ら引くなどの存在。カギロヒ（陽炎）もやはり光りかがやく朝ヤケ・タヤケの意味で、表記も「炎」などが使用されている。この被枕の句も「燎」が使われ燃えるという意味を現わすものが多い。これらの例を見ただけでも上代「カギ」・「カグ」・「カゲ」という語は、日・光・炎(火)などと関連が深い語であつたといふことは間違ひない。また、光という語とは違ふ意味領域を持つ光り方を意味する語であつたということも考えられる。上代では明^アけと赤^アけという光を意味する語と色彩を意味する語が未分化であつたということからも、影（カゲ）系列の光を意味する語の意味領域に色彩語としての性格があつたと考えることができる。カゲは赤系列の色彩を伴なつた光を意味していた語なのである。さて、カグヤ姫の名前に話をもどすとカグヤ姫のカグもまた、日・光・炎(火)という赤い色彩を伴なつた光と解することができる。カグヤ姫が「きとカゲ」になつたのは彼女の正体である赤い光の姿になつたのであり、日・光・炎(火)に関連する彼女の姿なのである。これに関連して説話の中に見られるカグヤ姫の名前の表記にも一定の解釈があつたように思わ

れる。海道記では「女を赫奕姫といふ。」としている。聖徳太子伝拾遺抄でも「此名ヲ赫奕妃」三國伝記「赫屋姫」古今和歌集序聞書三流抄「赫奕姫」などの例がある。これらはすべて中世の文献ではあるが名前の用字にもカゲ（カグ）という語に対して赤い色と言う解釈がなされていたと考えることができる。「赫」はもちろん火がまっかにかがやくことを意味している。以上のことからカグヤ姫の正体はやはり太陽および太陽に関わる神話的人物であったと言うことができる。

(五) 竹取物語の物語性

これまで述べて来たように竹取物語は表現においても、内容においても説話的であり説話性を引きずっていると言える。それではこの物語の物語性とは一体どこにあるのだろうか？説話系列の今昔物語集の竹取の話の構造は、「今は昔、口天皇の御世に、」で始まり、「而る間・而る間・其の時・其の後」という時間の羅列と助動詞「ケリ」によって展開されている。つまり、説話は時間を話の軸にして事柄を語るのである。今昔の結びにも「此る希有の事なれば、此く語り傳へたるとや」と言っている。これに対して竹取物語のカグヤ姫の昇天の部分は「ケリ」という語りの枠から開放され、説話世界の枠（時間を基軸にした構成）からも開放されている。竹取物語と今昔の竹取の大きな違いは翁との別れの部分にはつきりした姿勢の違いを見ることができ、竹取のカグヤ姫の昇天は心の動き・心情の変化を軸として物語を展開させている。行動も心情の変化に伴った形で描いている。竹取物語はその最終場面でやっと物語性を獲得したと言える。カグヤ姫の昇天の場面の心情表現を追ってみるとカグヤ姫は月を見て最初は、「常よりも物思ひたるさまなり。いみじく泣き給ふ。」とあるが、翁に月に帰ることを告白する

時には、「いたく泣き給ふ。人目も今はつつみ給はず泣き給ふ。」となる。ここでは翁に対しても心遣いを見せるようになる。別れの場面では心を惑わし、手紙を書き地上に残す人々に心を配るカグヤ姫の心情や行動が次々と描かれてゆく。翁についても同様のことがいえる。翁は理由も判からず泣く姫を心配し、告白されてからは「泣くことかぎりなし」というさまになり老化する。別れに際しては、「心惑ひて泣き伏し」別れた後には「血の涙を流して感ふ」のである。そして、ついには病となる。この場面では事柄や時間の推移が物語を展開させてはいない。ただカグヤ姫と翁・周囲の人々の心情の動きや変化、それに伴う行為や行動を話の中心に据えて展開し語っている。これとは対照的に「ケリ」と時間を話の中心に据えて事柄を語っていた車持皇子のウソ話の構造は説話の方法を駆使していると言える。カグヤ姫の昇天は心情を基軸にして「ケリ」や時間の枠から開放されているのである。

(六) 結論

竹取物語はその物語の中で前半部は説話性を持ちつつ構成され表現されていた。後半部（特に昇天の部分）では説話から物語へと変化している物語であると言える。源氏物語の中で「物語の出できはじめの祖なる」と言われていた竹取物語は、その内部に説話性と物語性を共存させ、昇天の部分で物語へと変化した物語なのである。話の変化を説話から物語へと流れの中で話のレベル・表現のレベル・話の構造や内容のレベルのそれぞれのレベルで本稿は捉えてみた。

物語・説話の項目

研究資料日本古典文学①物語文学

研究資料日本古典文学③説話文学

明治書院刊

注2 中秋名月と『竹取物語』 奥津春雄

注3 早稲田実業高校研究紀要4 一九六九年刊

平安朝の年中行事 塙書房刊 山中裕

第二章秋の行事観月の宴の項

注4 『ひかる』『かがやく』主人公と『かをる』主人公 高知女子大国文11、藤田加代一九七五年十二月刊 他にも湯原美陽子氏の「容

姿美に表れた「光」の系譜(→古事記にみられる「光の美」の意味するもの)カリタス女子短期大学研究紀要19一九八四年刊と「容姿美に表れた「光」の系譜王朝物語の主人公にみられる光の美の示すもの」実践国文学27一九八五年刊などがある。

注5 中納言の様子巻一「いみじく用意し給へるかたちありさま、光るやうに見ゆるを」とか「さまかたち、まことに光を放つやうなるを」と言っている。吉野姫君についても「気高くけうらに、あたりも光る心ちするさまは、なをたぐひなく思ひ出でられ」とある。巻四では尼姫の様子を細部にわたり表現している。「八尺の御ぐしを掻き垂れて、色々の御衣をたち重ねつつ、昔ながらの御ありさまにひきつくりひたらんは、この項今を盛り、いとどいかに光を放つ心ちして、目もあやにかかやかまし」とある。

注6 月の光を浴びている宰相中将の様子を「織物の直衣・指貫に紅の艶こぼるばかりなるを脱ぎかけて、いとささやかに見ゆれど、若くをかしげにて、月影に光るばかりめでたく見え」とある。

注7 巻二十八のわかみづでは章子内親王五十日祝の場面で「白くおはします様は、雪に光をそへたらん様にぞおはします。」などとある。巻二十五のみねの月の寛子の様子を述べるところに「ただ影のやうにならせ給へるものから、御色の白くうるはしく光かにおはします。」とあり、白さが光るといふ表現が目につく。

注8 一九八九年九月十六日に国語語彙史研究会にて発表した。「古代の光感覚と色感覚―カゲを中心に―」は国語語彙史の研究第十一集和泉書院刊に収録される予定である。

注9 国語・国文第24巻 一九五五年刊

「古代日本語に於ける色名の性格」

佐竹昭広

引用本文は大系本古典文庫・群書類従等を使用した。

その他参考文献

「竹取物語における「文体」の問題 阪倉篤義

国語・国文第25巻 一九五六年刊

「かぐや姫の本質について」 三品彰英

三品彰英論文集三 神話と文化史

一九七一年刊

一九八九・十一月二十四日稿